

---

# 真剣で幻が通る道

双六

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真剣で幻が通る道

### 【Nコード】

N0019Z

### 【作者名】

双六

### 【あらすじ】

川神院に一人の男がやってきた。

その男、17歳ぐらいで、全身真っ黒の格好だった。

ただ一つ、その男の瞳だけが

アメシストの宝石のように、紫色だった・・・。

超、人見知りの男が歩く、摩訶不思議の通り道。

## 0章 設定（前書き）

まずは、設定です。

作者は小説というものを書いたことがありません。  
更新日も未定で、

オリ主がチートによくある小説だと思います。  
よろしく願います。

## 0章 設定

設定

・黒峰 紫貴 （くろみね しき）

男

17歳

家族

黒峰 師禅 （くろみね しぜん）

親に捨てられ、5歳の頃師禅に引き取られる

最初の格好

黒髪

髪型は後ろで束ねた髪を刃物で乱暴に切ったようなおかつぱ

黒い羽織に黒い着物

靴は黒いブーツ

まああれです、イメージは空の境界で出てくる両義式が革ジャンの代わりに羽織を着て全身黒色な感じですよ

瞳はアメシストの宝石みたいな紫色ですよ

特徴

・破幻の瞳

ぶっちゃけ刀語ですてくる見稽古の強化版

・チートです

・天性の武の才能

破幻の瞳をフルで使える身体能力、川神百代レベルですよ

・チートです

・人見知り

誰も信じてません、自分も

・戦いを行うのを嫌います

人間嫌いなのでそもそも誰かと一緒に行動したくありません

・人の言うことを聞きません

自分が認めた相手以外、最低限の事しか聞きません  
自分の気分で変わります

・社会不適合者です

社会に関心がありません

最初は今、生きていればいいと思っています

・家事スキル

学べば一発でできますが、面倒なのでしません

・自分を大切にしません

リストカットや自殺といった自分から体をいじめる行為はしないが  
怪我をしても血を止めて終わりです

自分は居ても居なくてもいいと思ってますが、育て親の師禅が  
注意していたので、今のところ死のうとは思っていません  
しかし、生きたいとも思っていない

・学びたい

自分が知らない事、理解できない事を知りたいと思います  
これも自分の気分しだいです

・武術家ではありません

師禅に鍛えられたが、武人とは、など

なぜ武術家とならねばならないのか理解できないし  
進んで戦おうとしないので、武人と思っていません

チートがいっぱいですね

作者は小説という物を今まで書いたことがないので

オリ主のスキルがチートじゃないとなにもできません（笑）

温かい目で見守って下さい

後、タイトルの

真剣で幻が通る道

特に意味は無いです

主人公が幻のような人物だなあと  
フッと思いながら付けました

更新日は決まっています

どのように物語が進むか作者もわかっていません

## 0章 設定（後書き）

はい、駄文ですね、  
また説明を入れると思います。

## 1章 男と川神院（前書き）

はい、一話目です

駄文で、文才もからっきしですが

どうか温かい目で見守って下さると  
ありがたいです



## 1章 男と川神院

・・・侍・・・

それはもう消えてしまったもの・・・

しかし侍が抱いた武士道は、力と美の象徴として今での日本人の心に深く刻みこまれている・・・

現在、日本では武家屋敷や武道家が数多く存在する・・・

しかし・・・遙か昔、侍がいた頃と比べると現代は大きく違う事があった・・・

それは、女子が圧倒的に強いということ・・・

これは武家娘や武道家、色々な力を持つ者が多く通う、学校生活の物語

ここは川神院、関東三山の一つで、厄除の寺院として名高くそれが市の名前になるほどだという院。そして『己を高め気力で厄を祓う』という考えのもと、武道の鍛錬を行う場所として有名である

その場所に一人の男がやってきた

その男、歳は16〜20ぐらい、髪は黒髪で髪型は後ろで束ねた髪を刃物で乱暴に切ったようなおかつぱ、黒い羽織に黒い着物、靴は何故か黒いブーツ、黒い布袋を持っていた

つまり全身真っ黒なのである

ただ一つ、瞳の色だけが違っていた・・・アメシストの宝石の如く、紫色なのである

男はそのまま、川神院に入ってしまった

門をくぐると、川神院の門弟が立っていた

「本日はどの様なご用件で？」

すると黒い着物を着た男は

「・・・川神鉄心・・・居る？」

すると門弟は目を細め・・・

「・・・失礼ですがご用件は？総代との試合を望むならばまず総代の孫にあたる川神百代殿との手合わせが決まりとなっておりますが・・・」

すると着物の男は静かに首を横に振ると布袋から一枚の手紙を取り出し

「・・・居るなら・・・これ渡して・・・」

と門弟に手紙を渡した。手紙を受け取った門弟は

「・・・少々ここでお待ちを」

そう言っ門弟は男を残して素早く室内に入っ行っ

少しの間、男は川神院の建物を眺めていると、

「・・・ああ、この雰囲気、俺には合わなそうだ・・・ん？」

ぼんやりと建物を眺めていると後ろから人の視線を感じ静かに振り返ると、

黒髪のロングヘアの女が一人、門のところで男を見ていた。

「お？着物を着ているから女だと思ったら、男じゃないか。しかしなんだその格好？葬式の返りか？誰だお前？挑戦者か？」

男は無言で女を上から下にゆっくりと眺めると、興味を無くしたかのようにまた、前を向いてしまっ

「むっ、おい無視するなー、てゆうかこっち向けー」

女はそう言っ男の肩に手を置こうとして・・・空をきる

「・・・触るな、お前に用はない、消えろ」

女の隣で男は女を見ずに答える

女は少しの間、茫然とした後、顔をにやけて男をみる

「つれないことをいうなよーお前なかなか強いだろ？勝負しろ！最近挑戦者が来なくて退屈だっただ」

女は新しい玩具を見つけた子どものように笑いながら男に話しかける

「・・・消えろ」

男は女に冷たく言い放った

「私は川神百代、次期川神院総代だ、お前名前はなんていうんだ？」

「・・・・・・・・」

「お前はなにか武道をするのか？身のこなしが素人じゃないぞ」

「・・・・・・・・」

「お前の流派は？武器は？どの位強い？」

「・・・・・・・・」

「なーなー無視するなよーこんな美人なお姉さんがはなしかけてるんだぞー相手しろー」

「・・・・・・・・・・はぁ・・ウルサイ奴だ、消えろと言っている」

男はため息を吐きながら女を見ずに答える

「やっと返事をしたと思ったらそれかー冷たい男は他の女に嫌われるぞー」

百代はふてくされているような顔をつくり、男に話かける

「・・・・・・・・じゃぁ嫌いになっただろ？・・消えろ」

男は百代の方を向くが顔は川神院の方を見たまま答える

「他の女は、と言ったんだ、私は違うぞー、むしろお前に興味がある。勝負しろー」

「・・・・・・・・俺は興味がない、だから失せろ」

男の返事に百代は、

「そんな冷たい事を言う奴にオシオキが必要だ・・なっ！」

百代は男の顔面に向かっていきなりパンチを放った。だが男は、

「・・・・・・・・ひよい」

男はその場から一步も動かず、首だけを動かし飛んできたボールをよけるように百代のパンチをよける

「あはっ、これを簡単によけるか、何者だ？お前？最近の挑戦者はこれで大抵終わるのだからな」

「・・・・・・・・なんの真似だ？」

男は一段と機嫌が悪くなり、目を細めて百代を見る

「やっと私を見たな、そしてこの実力、期待通りだ、ますます興味

がでてきたぞ」

百代は男の強さにますます期待し、笑顔で男にはなしかける

「……いきなり殴りかかってくるような奴が次期総代だど？ 本当  
にここがあの話で聞いた川神鉄心が居る川神院か？」

男がぼそつと呟くと、百代は首を傾げ、

「なんだお前、ジジイによろがあるのか？ ……まあそんなことよ  
り私と勝負だ！」

百代の反応に男は呆れながらはなしかける

「人の用事をそんなことって……はあ、勝負勝負って餓鬼を相手  
にしてる気分になってきた」

男の返事に百代は頬を膨らませ、

「餓鬼ってなんだ餓鬼って、こんな美人なお姉さんを捕まえて」

「捕まえてない、むしろこっちが捕まっているんだ」

「いいから勝負しろーこんな美人の相手をするのになにが不満なん  
だよー」

「……全部、第一こっちにメリットがない……」

男の答えに百代は首をガクツと落としたが、なにかを思いついたか  
のようにまた顔をにやけて、

「全部って……ん？ ということは、お前にメリットがあるなら私  
と勝負するんだな？」

男は後で後悔をする、百代の強さではない、

どうしてももう少し百代というものに考えを働かせなかったのかを・  
・。

## 1章 男と川神院（後書き）

はい、ありきたりですね  
オリ主の性格が今後の作品で  
変わっていくかもしれません  
そこはご了承ください  
ではまた会いましょう

## 2章 男と武神（前書き）

早くもどう書いていいかわからなくなってきた・・・

## 2章 男と武神

黒い男から手紙を預かった門弟は川神院総代であり川神百代の祖父にあたる、川神鉄心の部屋に向かっていた

その頃、鉄心は

「はあ、最近のモモには困ったもんじゃのう、強い者と戦いたい戦いたいと最近はそればかり言いおってからに…最近は飢えが強くなつて抑えが効かんようになってきたしのう…ワシが相手になるかそれとも武道四天王に頼みを送るか、しかし最近のモモでは相手にするのキツくなってきたしのう」

鉄心は部屋で戦いに飢えている孫の心配をしていた、そこへ扉からノックが聞こえる

「総代、今大丈夫でしょうか？」

「ん？よいぞ、入んなさい」

扉から院の門弟が入ってくる

「どうしたのじゃ？」

すると門弟は手紙を渡し、

「今、門の入り口に全身真っ黒の格好をした着物の男が総代はいるかと、見るからに怪しかったので要件を聞くとこの手紙を渡してほしいと、名前は言ってこなかったのですがいま入り口に待たせております。」

門弟から手紙を受け取った鉄心は手紙を見て、

「はて？黒い着物の男？その様なものが知り合いにおったかのう？」

鉄心は手紙を読み始めしばらくすると急に驚き始めた

「なんじゃと！」

急に大きな声を出した鉄心に驚いた門弟は

「ど、どういたしました！総代！？」

手紙を読んだ鉄心は慌てて

「こっこの手紙を持ってきた男の眼は！瞳は何色じゃった！今、門

に居るのじゃな!？」

鉄心の慌てように驚きながら門弟は

「はっはい!今門の入り口に、瞳は・・・そういえば紫色でしたね」  
それを聞いた鉄心は

「早くここに・・・いやワシが迎える、男は門じゃ《ドーン》!!」  
!》・・・なんじゃこの爆発音は!・・・この氣はモモか!?・・・  
場所は院の入り口じゃと!まさか!？」

爆発音を聞いた鉄心は急いで門へと急いだ、

爆発音の少し前、門の入り口では、黒い着物を着て紫色の瞳を持った男と川神百代が居た

「私と戦う・・・メリット・・・金?・・・いや今は借金中だし・・・食べ物・・・いや、そこまでの物は作れない・・・」

百代は腕を組んでぶつぶつと男と勝負をしてもらうための条件を考えていた、その頃男はというと

「・・・遅いな、あの門にいた奴、ちゃんと川神鉄心に手紙を届けたのか?・・・勝負しか言えない餓鬼みたいな女が考え込んでいるうちに早く来てくれ・・・面倒事になりそうだ・・・」

無言で鉄心の到着を待っていた

「うゝん・・・はっ!!そうか、よし!」

なにか閃いたかのように百代は男の近くに歩いていく

「よししよう、いいか?これから勝負を行って負けたほうが相手に好きな願いを一ついう、相手はその願いを叶える・・・どうだ?」

百代が男のメリットを言うと言は、

「・・・はあ、まあいいか:引き分けの場合と時間制限は?」

男がけだるそうに百代に質問する

「時間は最高5分間、もしもそれ以上すぎるようならこの場が持たないからな、時間が過ぎた場合と決着がつかなかった場合は私の負けでいい!」



百代は子どものようにウキウキしながら説明を行う

「・・・本当にそれでいいのか？」

百代は

「ああっ！さあ勝負だ！今勝負だ！すぐ勝負だ！」

とても嬉しそうだ

男は

「はあ、・・・なんで俺なんかと勝負したがるんだか・・・」

すでに疲れていた

「私の武道家としての勘が言うのだ、お前は今までの会った同い年ぐらいのどの男よりも・・・強いと！強敵だと！」

百代は今まで自分が行ってきた勝負を思い出しながら答える

「・・・知るか、お前の勘もお前の知り合いも」

まあごもつとも、である

「・・・ふう」

百代は2／3秒目を閉じ、開くとそれはさっきまでの子どものような百代から川神院の武神、川神百代になっていた

「・・・！・・・とっとと終わらせるぞ・・・」

男は百代の様子が変わったことに気がついた

「川神流、川神百代、武器は素手だ」

百代は相手にお辞儀を行い構える

「流派・・・秘密、匿名希望、武器は・・・なしでいいや」

男は軽く頭を傾けた後、だらんと構えずに立っている

「おい、なんだそれ？名乗る意味ないし構えないって・・・」

「・・・文句は勝負中してから言え、殺してもらってもかまわん、知りたい事は願いでいいな、時間がおしい」

男が言うのと百代は黙り、また構えなおす

「それじゃあ・・・始め！」

そう叫ぶと百代は男めがけて強烈な突きの連打を放った！  
だがしかし

「・・・・・・・・」フッフッフスッシャ

男は無言で百代の突きを目で追いながら避けていた

「アハハハッこれが掠りもしないか！いいぞ思った通り・・・だ！」  
百代は数の攻撃を止め、速さと重さを込めた一撃を放つ

「・・・おっと！」

男は後ろに跳び、攻撃を避ける

「おいおい、今のは揚羽さんでもあたるぞ、本当に何者だ？お前？  
なぜここまで動けて私に名前が届いてこない？」

「・・・」

「これが・・・次期総代か・・・そこいらの武術家とはレベルが違うな、あの人以上だ・・・」

着地した男は考え事をしながら百代を見ていた・・・百代だけを

それを見逃す武神、百代ではなかった

「勝負中に考え事か！！川神流無双正拳突き！！」

「・・・！？」

とっさに百代の攻撃に気がつく男、しかし百代だけを見ていた為、  
自分がどこに立っていたかまでは気がつかなかった・・・背のすぐ  
後ろに門の壁があることに・・・

「！？しまっ」《ドカン！》

壁を背にした男に百代は正拳突きを当てる

「ふふふ、衝撃の逃れない上での無双正拳突き、想像よりも劣った  
が、四天王でもこれでおわ・・・！？」

勝ちを確信する百代・・・その時見てしまった、今まで味わった事  
のない死のイメージ・・・

自分を死へと誘うであろう、紫色の瞳を・・・

## 2章 男と武神（後書き）

自分で読んでも下手ですねゝ

駄文、乙です

暖かい目でおねがいしますね W

### 3章 男と武神 決着（前書き）

はい なんか早くもおかしくなってきました

### 3章 男と武神 決着

男に向けて、会心の無双正拳突きを当てた百代、勝ちを確信したがその時、見てしまった、相手の瞳を、その時感じた恐怖、自分に流れる死のイメージ、・・・殺される！

そう思った百代は無意識に動いていた、放ってしまった、・・・・・・  
・ 禁じ手を・・・・

「!? ひっ！富士砕き!!!!」《ドーン!!!!》  
コンクリートでできた門の壁を砕き、男は吹っ飛んでいく

・・・男は転がる、20mぐらい先を、そして動かなくなった  
少しして正気に戻る百代、その時気がつく、自分が何をしたのかを・  
・

次第に百代は段々と青ざめていく、

「わ・・・私はなにを・・・・さっきの一撃で勝負はついていたのに・  
・・・こ・殺してしまっ・・・・た？」

その場で立ち尽くす百代、そこへ鉄心が走ってきた

「なっなんじゃこれは!?!? どういう訳じゃモモ!!! 説明せえい!!」

そこで百代は鉄心に話す、青ざめながらゆっくりと、男に出会ってからのやり取り、決着がついてからの富士砕き、自分に感じた悪寒と・・・相手を殺してしまっただかもしれないことを・・・

「と・・・とにかく彼じゃ! モモ! すぐに川神院の救護班を・・・・!  
?」

そこで鉄心は止まる、ありえないものを見たように

「ああ! すぐに連れて・・・・? どうした? ジジイ?」

百代は鉄心が茫然としているのに気が付き、鉄心が見ている先を見て止まる、その見た先には男の死体はなかった。その変わりにいたのは

「・・・・痛い、それよりも一大事だ・・・・・・服が」

自分の体よりも百代の攻撃により、ボロボロになってしまった着物を気にしながらこちらに歩いてくる男だった

それに気が付き、喜びのあまりに男に抱きつこうと飛びつく百代

「良かった!! 無事だったか!!」ひよい「あぶつ!!」

男によけられ、地べたに転がる百代、男は百代を見ようともせず、鉄心の前まであるいていく

「・・・あなたが・・・川神鉄心?」

ボロボロの男に話しかけられ正気に戻る鉄心

「あっああ、いかにも、ワシが川神院総代、川神鉄心じゃ・・・おぬしが手紙に書いてあった・・・」

自己紹介をして、話そうとする鉄心、そこで頭の中で?がでる、そして・・・

「いやいや!? そんなことよりもお主!? 大丈夫なのか? 体は!?!」

平然と話す男を見て、さっきの百代の話を忘れていた鉄心、自分の紹介をし、手紙の事を思い出した鉄心は男に慌てて聞く

そこへ男によけられ、納得いかない顔をしながら歩いてきた百代が話かける

「・・・普通よけるか? こんな美人のハグを?・・・まあいい、そうだお前! 体は!?!」

二人の問いに男は

「・・・ああ、問題ない」

男の答えに、ほっと安心する二人、しかし

「・・・腹と背中に激しい痛みと内出血、左腕の骨が折れて、アバラ骨の数本にヒビが入ってる、そして着物が死んだ・・・ぐらいだ」

男は自分の体を確かめるように見ながら、傷の具合を告げる

「「いや!? それは問題しかない(だろ!・じゃろ!)」」

男の問いに二人合わせてつつこみをいれる

「なんで平気そうな顔してるんだ!?! お前!?!?」

慌てながら男に問いかける百代、男は

「・・・それよりも・・・ごほっ・・・訂正、・・・臓器も傷ん

でた・・・」

ごほっと吐血し、地面に落ちた血を見ながら男は答える、そして・

「・・・・・・・・あ、まずい」

どさっと男はその場にゆっくりと倒れた

その場に倒れ、動かなくなった男を茫然と見ている二人、そして

「・・・・・・・・っ!? わぁー! ジジイ! 救護班!」

「・・・・・・・・!? そ、そうじゃ! モモ早く彼を部屋へ! 話はあとじゃ!」

二人は大慌てで動き出す、百代は男をかついで建物の中へ  
鉄心は急いで救護班の所へ走って行った

男を担ぎながら走る百代、走りながら男を見て、百代は

「それにしてもこいつは本当に何者なんだ? あの様子からじゃ全然本気じゃなさそうだったし・・・それにあの時のこいつの目・・・殺されるかと思ったぞ、」

腕の中で眠っている男を見て、百代は考える

「・・・勝負は私の負け、もっと長引く予定だったのに、まあいいか、さてこいつは気がついていいるかな? あのメリットのはなし・・・これから楽しくなりそうだ」

百代はにこやかに笑っていた

そうして百代は男を担いで、男を休ませる部屋へ走って行った

「その男はモモが部屋に連れていっている、頼んだぞ」

「はい! 総代!」

救護班に指示をだし、救護班を部屋に向かわせた鉄心は男がいる部屋へと歩きだす

「彼が本当にあの手紙の通りなら、あるいはモモの渴きを癒せるかもしれないの・・・さてはて、これからどうなるのかのう? 楽しくな

りそうじやわい、彼が起きたらまずは話をせんとのうゝ  
ホッホッホと鉄心は歩きながら男のもとへ歩いて行った



### 3章 男と武神 決着（後書き）

一体、この小説はどこに向かうのか…  
それは誰にもわからない（笑）

## 4章 男の正体（前書き）

やっとうり主の名前公開ですわ

主人公の名前が出てくるのが4話以降って  
ありえないっすねゝ

## 4章 男の正体

「ジジイ、説明しろよ、なんなんだこいつは？なんで私と同一歳ぐらいであの実力の男が私の耳に届かない？間違いなく四天王クラス：いや、私レベルだったぞ？」

「なんじゃいモモ、その口のきき方は、お前は次期総代としてのだな…」

「だまれジジイ、話をごまかすな」

勝負の後、救護班の治療を終え、布団で眠っている紫色の瞳を持つ男、その横で川神鉄心と川神百代は言い合いをしていた

「はあ、なぜこう育ってしまったのかのう…まあいい、この男の事はワシも詳しくは知らなかったのじゃ、しかたなكارう」

「ジジイでも知らなかったって、どういうことだ？この男はジジイに会いにきたのكارう？」

百代が頭の上に？をだしていると、鉄心が懐から手紙を出して、百代に渡す

「ワシの知り合いの所で育っていた子でのう、その者から手紙を持ってきたのじゃ、名前は黒峰紫貴<sup>くろみねしき</sup>、詳しくはこの手紙を読んでみ、後はこやつから話を聞かんことにはのう・・・」

「黒峰紫貴か・・・手紙ねえ・・・」

そう言って百代は手紙を読みだす、手紙には

『黒峰師禪<sup>くろみねしぜん</sup>より川神鉄心へ

久しいの鉄心、こんな手紙で許してほしい

お前には、言っていなかったが、私は病にふせておっての、自分の体のことだそう永くは生きられん、その前にどうしてもお前に頼みたい事があるのだ

私が引き取って育てている紫貴、黒峰紫貴の事だ

私が死んだ後はこの手紙を持って川神市にある川神院、川神鉄心、私の親友にこの手紙を届け、鉄心の言うことを聞くように言い聞か

せてある

紫色の瞳をしている子だ

本当に勝手だと私も思う、しかし鉄心、もしも本当に私の事を親友だと思ってくれているのならばどうか頼む、

あの子を見守り、育ててあげてほしい

あの子には少々厄介な事があっての、今の今まで他人と接する事ができず、

自分から他を遠ざける節がある

私もあの子を引き取ってから、あの子に認めて貰うのに数年かかった…

あの子は可哀そうな子だ、人の温もりを知らん

もし一人で生きていくような事になれば、一生を孤独に終えるだろう  
あるいは自分で終わりにしてしまうかもしれない

あの子は自分を大切にせず、ないがしろにする癖がある

これも認めて貰った後から少しずつ直していこうと努力したが

私では最後まで直してあげられなかった

話が長くなったな、私もまとめるのが下手でな

あの子は頭がいい、良すぎるんだ

あの子は学ばせようとした事はすぐに覚えるし、自分の知らない事は知ろうとする欲もある

けれども心はまるで空だ、私では満たしてやる事ができなかった  
どうか頼む、あの子を助けてあげてくれ

あの子の事だけが心残りだ

勝手だと分かっているがあの子を、紫貴を頼む

信じているぞ、親友

私は先に行く、あっちできっと見守っていると紫貴に伝えておくれ  
ではさようなら、鉄心、私の唯一無二の親友よ』

手紙を読み終えた百代は布団で眠っている黒峰紫貴を見る

「……………」

彼女も理解できる所があるのだろう

今の仲良しグループ、風間ファミリーや

義妹の一子が居なかったらと：

「…私は今の皆がいなかったら、今の私ではいられなかっただろうな…」

で？ジジイ、こいつの事はどうするんだ？」

百代は真剣な顔つきになり鉄心に問う

「むろん、親友の頼みだ：いや、そうじゃなくてもこやつはほっとけはできん

こやつの目をみたらすぐにわかった、孤独で他を信じられん目じゃ」  
鉄心の答えに満足したのか、百代は肩の力を抜いた

「まあ詳しい話はこやつが起きてからじゃな」

そう言って鉄心は部屋から出ていった

「…そういえばこいつの力のことや目のことは手紙にかかれていなかったな、ま、起きたらこいつに聞けばいいか」

百代はじいと紫貴の寝顔をみていた

「…この手紙の事はモモには時期がくるまで黙っておくとしようかのう」

鉄心は懷から百代に渡したものの他にもう一枚、違う手紙をだして  
呟いていた

『追伸、

鉄心、もし私の頼みを聞けない事があるならこの手紙は見ずに処分  
しておくれ』

折り畳まされた手紙にはこう書いてあった、中には

『鉄心、ありがとう

お前には迷惑をかける

あの子を育てる上で知っていて欲しい事を書いておく、他言は無用だ  
あの子を引き取ったのはあの子が5歳の時だ、あの子はとある村の  
子での

私が出会った時、あの子は瀕死だった

親はいなく、捨てられたらしい、村人からは鬼子と恐れられ、村人から暴力を受けたり、遠ざけられたりしたようだ

理由はあの子の目だ、アメシストの宝石のように綺麗な瞳だろう？

私はあの瞳に‘破幻の瞳’と名付けた

どうやらこの目は一度みたものを覚え、簡単な事なら自分で真似できてしまうようだ

見る回数が増えればそれは確実になり、応用すらできるらしい

・・・おそらく、子どもでは出来ん事を出来てしまうあの子に恐怖し、

親はあの子を捨てたのだろう

村でも気味悪がれ、あの子を恐れ、鬼子、と化け物のように扱われていたようだ

おまけにあの子には天性の武の才能があった

あの子を引き取り、認められてからは、あの子を鍛えた

するとどうだ、あの子は15にして私を超えてしまった、信じられるか？

歳を取ったとは言え、若きころはお前にも対等に戦えた私をだぞ？

・・・恐らくあの子は今のお前よりも強い

私は嬉しかった、あの子がどんどん強くなっていくのが、

だが同時に恐れもあった、あの子は人を信じず、今は他を避けるだけだが

もし、他の者を敵と認識し、恨み、社会と敵対することがあるなら

あの子を止められる者がいるのか？と

今までは私がいた・・・しかしこれからは違う、私も永くはない

あの子には信じ合える友が必要だ

あの子を導いてあげて欲しい、頼んだぞ』

そう書いてあった

『・・・しかし東の武神、西の武帝と言われ、若き頃はワシと同じ師のもと

切磋琢磨しワシと互角だった師禅を超えた子か・・・そうじゃモモと同じ川神学園にいろか？あそこなら紫貴を気味悪がる奴もいないだろうし、モモの欲求不満も収まるやもしれん」  
鉄心はそう考え、歩いていった

「・・・あわよくばモモとくつつかなかのう、ホッホッホ」

#### 4章 男の正体（後書き）

うゝん

こんな感じでいいのかね：

いつになったら学校の話にいけるのか：



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0019z/>

---

真剣で幻が通る道

2011年12月3日18時01分発行